



信濃川・阿賀野川の流域を示すジオラマ

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.42

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.42

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

CONTENTS

特集1	小蒸気船「新潟丸」の建造をめぐる謎	P.2~3
特集2	企画展 ワンダーランド近世新潟町	P.4
歴史さんぽ	大圓寺堀周辺	P.5
おすすめの冊	地域アート 美術 / 制度 / 日本	P.5
みなとびあ 研究notes	ボランティア研修旅行・ 「紫雲寺潟干拓跡」と「松ヶ崎掘割跡」を見る	P.6
館長日記	断章—西安と函谷関を行く—	P.7
収蔵資料紹介	絵葉書「堀直寄奇進 金銅釣灯笼」	P.7
博物館あちらこちら	みなと・さがん	P.8

—はんしゅうせいりん—



たいけんのひろばプログラム

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・参加費・対象
1/6(土)・7(日)・8(月祝) 14:00~15:00	お正月あそび	お正月ならではのあそびを楽しみましょう。	申込み不要・どなたでも・無料
1/13(土) 14:00~15:30	小刀でイタドリ オリジナルペンづくり	小刀などを使いながら、イタドリという植物からオリジナルのペンを作ります。	要申込み12/20(水)から先着・小学生10人先着・無料
1/14(日) 14:00~15:30	こども歴史クラブ 「和綴じのノートづくり」	江戸時代にはいろんな形で本を綴じる方法が職人によって生み出されました。職人技をならって、ノートを和綴じで作ってみましょう。	こども歴史クラブの部員が対象です。
1/20(土) 10:00~12:00	みなとびあワラ部	ワラゾウリづくりの自主練習をします。初心者の方もどうぞ。	ワラ部部員が対象です。
1/21(日) 13:30~15:00	布をつくってみよう	空き箱を使った織り機で裂き織りのコースターを作ります。	申込み不要・どなたでも・無料
1/28(日) 10:30~12:00	みなとびあ 親子自然体験・冬	みなとびあの敷地で自然に触れながら親子で楽しく遊びます。	要申込み1/17(水)から先着・2歳以上の未就学児と保護者15組・無料

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申込み締切日は、当館までお問い合わせください。

企画展 「ワンダーランド近世新潟町」展

発掘調査によって見つかった陶磁器や屋敷跡などの考古資料と、絵図や書籍などの歴史資料をあわせて展示し、江戸時代の湊町新潟の繁栄を紹介します。

- 会期** 2017年12月9日(土) ~ 2018年1月28日(日)
- 休館日** 毎週月曜日(1月8日は開館)、1月9日(火)、年末年始(12月28日~1月3日)
- 観覧料** 無料 *常設展示の観覧は有料です
- 主催** 新潟市歴史博物館(みなとの博物館ネットワーク・フォーラム助成事業)
- プロジェクト協賛** NST 日和山五合目 北陸ガス株式会社 NSG新潟総合学院 信濃川ウォーターシャトル(株) (株)本間組 (株)田中屋本店 (株)堀川 (有)新潟たけうち

協力 新潟市文化財センター

関連事業

■展示解説会

毎週日曜日 午後2時から(1時間程度)

■まちあるき

日 時:1月27日(土) 午後1時30分~3時
 コース:みなとびあ(企画展示室)→ 広小路近世新潟町跡発掘地点→ 古町花街界隈→ 西堀寺町界隈→ 旧小澤家住宅→ みなとびあ
 参加費:300円(保険料・観覧料等)
 定員:15名程度
 申込み:1月17日(水)締切(応募多数の場合は抽選)。
 EメールまたはFAXか往復はがきで、
 ①事業名・②氏名・③住所・④連絡先電話番号を記入の上、博物館まで。FAXの方は返信用にFAX番号もご記入ください。
 ※荒天の場合は中止

次回企画展 収蔵品展 「観光・新潟」・新収蔵品展

収蔵品展は「観光・新潟」と題し、戦前から戦後に発行されたパンフレットをもとに移り変わる新潟の姿を紹介します。新収蔵品展では、今年度新たに収集した資料を紹介します。

- 会期** 2018年2月10日(土) ~ 3月25日(日)
- 休館日** 毎週月曜日(2月12日は開館)、2月13日(火)、3月22日(木)
- 観覧料** 無料 *常設展示の観覧は有料です

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

時間 13:30~15:00 **会場** 本館2階セミナー室
申込 不要(当日受付・定員80人程度) **資料代** 100円

- 12月の講座:12月24日(日)**
「近代新潟の女子教育を支えた人びと」
講師:藍野かおり
- 1月の講座:1月28日(日)**
「近世新潟町における漁業・魚売」
講師:安宅俊介

お知らせ 1月29日(月)~2月5日(月)は設備整備のため休館です。

博物館あちらこちら みなと・さがん

萬代橋下流の信濃川左岸港湾緑地の愛称です。港湾機能を併せ持った親水空間として整備されています。みなとびあと川の間は、みなとびあ敷地とつながるようにつくられた滞り型の空間となっています。実際には博物館の敷地ではありませんが、対岸からは、みなと・さがんと一体化した博物館の敷地全体の景観が楽しめます。開放的な水辺と近代の新潟を象徴する建物との組み合わせはみなとまちらしさを感じさせます。また、ここからは対岸の県営埠頭やフェリーふ頭を一望することができ、新潟西港の今を感じることができます。正面のフェリーターミナルから大型フェリーが出航する様子は圧巻です。ここを見るのも、ここから見るのも楽しめます。



編集 後記

42号では、当館の市民ボランティアの方にも執筆にご協力いただきました。ボランティアの活動は、敷地内の歴史的建造物や常設展示のガイド、たいけんのひろばでのサポートですが、そのほかにも自主的にさまざまな企画や研修を行っています。このようにみなとびあでは、展示を見るだけでなく、博物館という場をさまざまに活用しながら、歴史や文化を楽しむことができます。(中村)

■お問い合わせ・申込みは博物館まで
新潟市歴史博物館 みなとびあ
 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
 Tel.025-225-6111 Fax.025-225-6130
 E-mail museum@nchm.jp URL http://www.nchm.jp
 【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)
 【開館時間】(4-9月)9:30~18:00 / (10-3月)9:30~17:00



2017. 5. 28 現在

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。

NST 日和山五合目 **北陸ガス** **NSGグループ** **Water Shuttle**

本間組 **田中屋本店** **堀川** **新潟たけうち**

■ 帆樫成林「はんしゅうせいりん」第42号
 ■ 編集・発行 / 新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
 ■ 印刷 / 株式会社博進堂

小蒸気船「新潟丸」の建造をめぐる謎

伊東 祐之

「新潟丸」

新潟開港一五〇周年を前に、開港や近代の新潟港の歴史にかかわる調査や研究が進んでいます。その成果の一つとして「新潟丸」のことについて記したいと思います。「新潟丸」は新潟税関に配備された小蒸気船です。

新潟開港に関する基本文献の一つに『新潟開港百年史』があります。この本は「新潟丸」について次のように記載しています。

新潟運上所は明治四年六月に英国造船工師(技師)マクニホールを雇備し、佐渡夷港において鉄製蒸気船を建造する事になった。そのために相川町北沢の製鉄所に溶鉱炉をつくり、そこで精錬した鉄材を以て鉄船を建造する事にした。現在の両津市築地の正覚寺裏に事務所を置き、農林省新潟食糧事務所両津支署裏の加茂湖畔に入り江を掘つてそこに工場を建てた。翌五年七月になつて、一本マスト一本煙突の鉄船「新潟丸」の建造を竣工した。船長一四間三尺(二六・三メートル)船幅三間一尺(五・七メートル)四九屯であつた。これが我国で始めて建造された鉄船第一号である。当時のこの鉄船は骨組みは木で、その上に鉄板を張り合わせて作つた。

小蒸気船の新潟運上所配備

この記述は詳細でこの後の「新潟丸」に関する記載の典拠になっています。しかし、記述の根拠はわかりません。明らかに誤りもあります。北沢に溶鉱炉が建設されるのは明治七(一八七四)年であつて、明治四(一八七二)年にはできていません。そこで外務省外交史料館の史料や新たに発見された個人蔵文書などに基づいて、「新潟丸」建造について検討してみたいと思います。

小蒸気船の建造

すぐに蒸気船は輸送されませんでした。七月になつても横須賀製鉄所で「右船器械之内いまた充備不致」と、遅れていました。九月六日、佐渡鉾山の視察と機械を輸送するために鉾山正を兼ねる井上勝民部権大丞や官吏、御雇外国人らを乗せたアメリカの蒸気船「ヤンシー」が夷に到着します。この船で小蒸気船は運ばれてきました。

船や機械は井上の命でヤンシーから降ろされました。大きくて陸揚げが困難な品は「五六十石積以上之船四艘乗七置」かれていました。十九日に大風雨によって一艘が破損しますが、蒸気

「新潟丸」の就航

建造に取り掛かると不足品があり、星野らは佐渡鉾山や相川県へ「舶来四分丸釘」や材木、鉛、銅線、銅板などの融通や輪の製造者、優秀な大工の紹介を依頼しています。一八七一年五月には夷では「器械欠乏品并蒸気管切合セケ所」が製造できないと、鉾山での製作を依頼しています。

一八七一年六月、小蒸気船は竣工しました。小蒸気船は「新潟丸」と名付け

られ、新潟へ回漕するにあたり、星野らは佐渡県の深見勝平と勝見綱蔵を船員とすることを佐渡県へ依頼します。勝見の江戸時代の経歴は不明ですが、深見はもと佐渡奉行所御船水主で、佐渡県職員となりました。小蒸気船の建造に際し佐渡県から夷港外務下掛として夷に派遣され、「伝習生」として勝見とともに「マクニホール」の下で働いていました。後に新潟県は佐渡県に「深見勝平、勝見綱蔵義、蒸気船打建之始より機関其外日々熟覧、当時は機関取扱ニ勝候間、新潟丸船機関手ニ召使申度」と依頼し、両人は新潟県の職員となりました。

新潟丸は、新潟港へ同年七月四日、新潟運上所先に碇泊しました。水戸教伊藤仁太郎が新潟港へ入港した西洋型船を記録した「第一号西洋形船舶留記」には「佐州夷子ニおめて合船当県御船御運上所持新潟丸、忝本柱白忝本筒、右船未七月四日七ツ時頃当港江入船、御運

上所先迄走登り碇泊仕候也 船長サ拾四間三尺 幅サ三間壹尺」と記載され、「図一」のように描かれています。

新潟丸はすぐに就航できません。船の備品を買いそろえる必要がありました。さらに船員をそろえなければなりません。十月になつて「火夫」を雇用している記録があります。また船長は新潟在住のオランダ商人「フアグ」を同年暮れに雇用したようです。翌年五月に平松県令がイギリス領事「エンズリ」へ送った書状に「当港備小蒸気船落成試験モ相済候」とあり、竣工から一年近くを要して漸く運航できるようになったことがわかります。

さらに運航規則を外国領事と協議して定める必要がありました。県令が平松から楠本へ代り、ようやく八月になつて規則ができました。この協議中に「エンズリ」からの照会に県が答えた文書では、新潟丸の性能を「凡五十噸」「十馬力」「長サ十三間尺四寸」

「幅三間」「深サ五尺五寸」「石炭凡七噸積」「船形スクーネル」「碇式挺」「鎖式筋 大四十一尋、小三十五尋、但シ一尋五尺」「ライフホート壹艘」「スチーラムウイン 壹ツ」「鉄製、但製造場所佐渡夷港」「鉄板厚サ三分」「甲板松ノ木」「スクルーインジン」「船行西洋一字間凡三里」「石炭費用日本一時二我三五貫弍百目」「乗組船司蘭人フアグ、日本士官三人、水火夫七人」などと記載しています。

いくつかの謎

『新潟開港百年史』は新潟丸を日本で最初に造られた鉄船だと述べています。しかし、外務省から民部省にあてた文書によれば、新潟丸は横濱で買入れた三艘のうちの一艘を佐渡で組み立てた船です。二艘が横須賀で組み立てられたのであれば、この船が最初となつてよさそうです。たしかに明治二十(一八八七)年の「船名録」を見ても一八七二、二年に横須賀で建造された蒸気船は記載がなく、新潟丸は一八七一年に佐渡で「築造」されたと記載されており、鉄船としては一番古い記載です。しかし一八八七年までに廃船となつている可能性もあるのではないのでしょうか。

管見する所、新潟丸を日本で最初に造られた鉄製蒸気船と記載したのは一九二五(大正十四)年刊の『明治工業史造船編』が最初と思われます。「わが国建造の最初の鉄船は、明治四年、新潟

税関が佐渡夷港にて建造したる「新潟丸」なり。然れども設計は之を海外に仰ぎ、本邦にては単にその組立てをなしたるに過ぎざりき。」と記載しています。この但し書部分が忘れられて使われてきたのでしょうか。「新潟開港百年史」は鉄製蒸気船を造船するからには製鉄が必要と考えて北沢の溶鉱炉と推測して記したのでしょう。

同時期の史料で日本人によって「マクニホール」あるいは「ニコル」と記載されるイギリス人を「マクニホール」と最初に記載したのは明治二十四(一八九一)年二月の「新潟新聞」掲載の売却広告です。以後、「マクニホール」と記載されるようになり、「新潟県史」は「Manshall」と英文表記もしています。外務省からの照会に明治四(一八七二)年十一月に新潟県が答えた文書には「右英人は去年十月中民部権大丞井上同行佐州江罷越、同人直引合ニテ諸事取計相成候義ニ付、其前民部省より御省へ引合之上御雇入相成候事と心得罷在候」とあり、民部省が外務省に照会して雇つたと認識しています。調査中ですが、今のところは彼と思われる御雇い外国人を発見できず、当然、英文表記も確認できていません。「器械家外国人」として派遣されたはずなので、造船技師であつたのでしょうか、それも確認できません。

組み立ての開始時期や場所、竣工の時期などは確定したかと思えますが、なお謎の多い船です。
(いとう すけゆき 副館長)



図1

企画展 ワンダーランド近世新潟町

小林 隆幸

浜を山手という。通りが流れと同じに弧をえがく。海岸からの砂が吹き積もる。沈下しては盛り上がる。

今回の企画展で取り上げるのは、江戸時代の新潟町です。信濃川河口付近の左岸、古町通や榎谷小路が走る現在の市街地がかつての新潟町です。砂丘と信濃川に挟まれた新潟町は、川の流れによって町の形が決められ、また、海岸から飛んでくる砂と土地の沈下に対応しながら町を維持してきました。そのため、少々風変わりな町となりました。

新潟町は信濃川の河口部につくられた港町です。その起源は明らかではありませんが、戦国時代の永正年間頃には町ができていたと考えられています。この頃の新潟は、江戸時代の新潟町よりも西の方にあったようです。対岸の沼垂町と同じように、新潟町も何度か移転しています。最後の移転が明暦元（一六五五）年です。現在の市街地は、この時に移転整備された町割りを引き継ぎ、その上に重なる近代的な街へと様変わりしています。新潟の海岸側には砂丘が連なり、その長さは七〇キロメートルにも及びます。この長大な砂丘は、信濃川と阿賀

野川が運ぶ砂によってつくられました。平野の中で一番高いところが砂丘です。

北原白秋作詞の童謡「砂山」や新潟市民歌の「砂山」の曲名にある「砂山」は、どちらも新潟の海岸砂丘を指しています。また、戊辰戦争で新潟町が戦場になった時の新政府軍関係者の日誌などに、「山ノ手を進ム」や「山手へ進撃」など、「山手」という記録が見られます（註一）。もちろん新潟に山はないので、この「山手」も海岸砂丘のことです。「砂山」同様に、よそから来た新政府軍の兵士にも、松の植わった砂丘は山に見えたようです。



江戸時代末の新潟町想像図

広大な平野の河口部に位置する新潟町に山があり、しかも海の方角にあるのは、あらためて考えると不思議です。

また、上大川前通や古町通など、街の通りを歩いていると、微妙にカーブしていることに気付きます。街の軸となる通りのカーブは、信濃川の流れに沿ったものです。同じ通りでは、どの位置からも川からの距離が等距離になるようにつくられています。富をもたらず信濃川の流れに従い、その川岸を軸に町がつけられた結果が通りにも現れています。

前述の山手とされる長大な砂丘ができたということは、大量の砂が飛んできて積もったことを示しています。つまりこの地域では、飛砂が当然のことのように起こっていたのです。飛砂の害から町を守るため、町を治める長岡藩は江戸時代の中頃には浜に松苗を植えさせています。その後、新潟が天領になってからも、飛砂に驚いた初代奉行の川村修就は、天保十五（一八四四）年（嘉永二（一八四九）年）にかけて二万六千本余りの松苗を植林しています。現在も続く飛砂との戦いは、すでに江戸時代から始まっています。そして近年、現在の市街地の地下深くから江戸時代の町跡が見つかるよ

うになりました。屋敷跡のほか、多くの焼き物や当時使われた道具が数多く出土しています。最初に遺跡が確認された広小路堀地点では、地下一・五メートル付近から建物の基礎が見つかりました。他の地点でも二メートル以上も深いところから焼き物などが見つかっています。その位置は海面よりもずっと低い場所です。

深い場所から見つかる原因は地盤沈下です。町ができてからこれまでの間にそれだけ下がったということ。広小路堀地点の調査では、一〇回以上も土盛りをして屋敷地をかさ上げしている状況が明らかになっています（註二）。地盤沈下への対処も新潟町の特色です。

こうした江戸時代の新潟町の不思議さに目を向け、二〇一九年の新潟開港一五〇周年を目前に、当時の絵図や絵画、そして近年の発掘調査の成果を持ち寄って、江戸時代の新潟町の様子を浮かび上がらせてみるのが、今回の企画展の趣旨です。

（こばやし たかゆき 学芸員）

（註一）東京大学史料編纂所一九三〇「復古古記第三冊（一九七五年複製 東京大学出版会）
（註二）新潟県教育委員会二〇〇八「近世新潟町跡広小路堀地点」

歴史さんぽ

大圓寺堀周辺

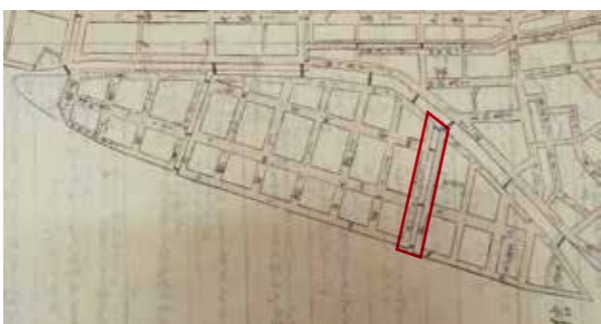
中央区新島町通3ノ町

現在の新潟市中央区秣川岸通2丁目から下大川前通4ノ町と5ノ町の間を歩いて信濃川に至る2本の道路があります。この道路に挟まれた所にはかつて北新堀と呼ばれた堀がありました。この堀は、明治初期の県令楠本正隆の時代に、秣島・榛島周辺の開発に伴って、他門川から信濃川へ行き来できるように造られた2本の堀の内の一つです。この北新堀よりも南側にもう1本造られた堀は南新堀と言いました。ちなみに、秣島・榛島の開発では、2つの堀のほかにも新たに新島町通・礎町通・下大川前通を町割りし、新島町通と礎町通の間に花町・月町・雪町を定めるなどして、高級住宅街としての整備が進められました。やがて、2つの堀は埋め立てられますが、南新堀は、初代萬代橋の橋詰に当たって明治19（1886）年になくなり、北新堀も明治30年代の前半には埋め立てられてしまったようです。

さて、北新堀は大圓寺堀との呼び名もありました。それは、北新堀の北岸（新島町通3ノ町）に、真言宗の大圓寺というお寺があったためです。大圓寺の由緒によると、寺の開基は寛文3（1663）年のこととされています。寺ははじめ古町通二の町（現在の古町通5番町東側）にあり、明治元（1868）年に北越戊辰戦争の兵火を受けて、現在の場所に移転しました。

この大圓寺の歴代住職の一人に、即身仏となった観海上人がいます。彼は、明治11（1878）年に、衆生の苦悩を救わんとして発起し、一握りのゴマと鐘を持って土中に入ったとされています。昭和51年の発掘により即身仏となった観海上人が実際に確認されています。

大圓寺の前から堀があった通りを信濃川に向かって進むと、大圓寺公園という小さな公園があります。かつて



北新堀（『美知之枝折』明治10年発行）



報時塔

大圓寺

ここには、高さ約26mの鉄筋コンクリート製の報時塔が立っていました。文字通り決まった時刻になると「ポー」という音を響かせ、時を伝えるとともに、塔の望楼から眼下の火災を監視する役割を担っていました。この塔が竣工したのは、大正13（1924）年1月26日のことですが、皇太子（のちの昭和天皇）ご成婚を記念して建設されました。なお、市民に親しまれてきたこの報時塔もその役割を終え、倒壊の危険性が考慮され、昭和36（1961）年10月に解体されました。跡地にできたのが、現在の大圓寺公園です。

若崎 敦朗（わかさき あつろう 学芸員）



観海上人塚

おすすめの一冊

地域アート 美学／制度／日本

地域の名を冠したいわゆるアート・フェスティバルは、今や全国百か所以上で催されているそうです。こうした「地域アート」は日本では一九九〇年代に注目され、これを町おこしの切り札と目する自治体がこぞ採用し、増加してきました。ただ、事業目的からみれば「アート」はあくまでも借物であり、他方、協働の充実感に浸りたい参加者たちは結果としての作品評価には無関心のようです。前衛芸術風のスタイルをまとったユートピア的公共事業が、そこに生成される作品の質を問うことなく、批評を排除してきたのではないかと。こうした疑問から、本書はそこに潜在する美学的・制度的な諸問題を切り口に、これが日本固有の倒錯した現象であることを指摘します。やや難解ですが、ほとんど対談録。特に会田誠の証言には説得力があります。なんとか芸術祭のたくいもそろそろ冷静に検証されるべき、とお考えの方には首肯の一冊です。

（木村一貫 学芸員）



藤田直哉編
堀之内出版
2016年3月

ボランティア研修旅行・

「紫雲寺瀉干拓跡」と「松ヶ崎掘割跡」を見る

山崎 雄

みなとぴあの市民ボランティアは、毎年自主的な研修会を行って地域の歴史に対する理解を深め、ガイドなど日々の活動に役立てています。

常設展示の「抜けちゃった松ヶ崎」の現地に行きたいとの要望を受け調べ始めると、紫雲寺瀉はきれいに圃場整備がされ、松ヶ崎掘割場所は新瀉飛行場へと変わり、場所を推定するだけでも難しいのではないかと思われるスタートになりました。

現地の下調べとしてまずは新発田に向かい、最初に地域振興局で北蒲原の干拓に係わる資料を多く頂きました。紫雲寺地区公民館では紫雲寺瀉干拓前(旧紫雲寺町指定文化財「享保6年紫雲寺瀉絵図」を元に再現)と現在のジオラマが比較展示されており、そこで紫雲寺瀉の歴史探訪案内パンフレットを見つけました。作成者を探して連絡し、紫雲寺瀉に注いでいた境川のメ切推定場所及び今泉川から姫田川への瀬替(付け替え)について教えてもらいました。

また、掘割については先輩ボランティアから紹介を受けた方が昨年地域郷土史講演会で掘割について講演されていたので、その方に話を伺い、現地でも説明をしていただきました。

め、それをみなとぴあの学芸員と幹事二人に読んでもらい、不足部分や疑問点を調べ直し、見学ルート表を作りました。四人で現地確認を一日掛けて行い、昼食会場やトイレ休憩場所を含めたルートの見直しを行いました。

研修当日は肌寒い曇空の中、ポートを掲げながら概略説明し、現地を確認していききました。

【見学ルート】

北区郷土博物館↓メ切集落で今泉川瀬替場所↓姫田川の加治川合流箇所↓落堀川堤防と河口↓米子白山神社(境川推定メ切場所も含む)↓紫雲寺境内墓地↓加治川治水記念公園↓阿賀野川左岸↓空港ターミナル

なお、北区郷土博物館で前館長の講話とボランティアのガイドをお聞きしました。他館のボランティアガイドの様子を知りたことも研修目的の一つでした。

下調べをした中で、次の三点がとくに印象深く感じられました。

①紫雲寺瀉干拓を行った竹前兄弟

兄弟は幕府からの報奨金などを資金とし、ほかに資金提供を受けた会津屋佐左衛門ら三人と、干拓技術者でもあった柏崎の豪商・宮川四郎兵衛と養子儀右衛門の協力を得て干拓を行った

ことが成功につながった。また、地元に関わりのない竹前兄弟は、干拓という目的だけを指してさつさと工事を始めた。このようなことではないかと新田開発は進まなかったのではないかと推測される。

②何故、この松ヶ崎の地に掘割を

海岸から六九三メートルと海に近く、砂丘が十三メートルと低いためという従来説があるが、ほかに①福島瀉、鳥見前瀉も一緒に干拓したい、②阿賀野川との舟運も確保したい、という新発田藩の考えに最適の場所だったと考えられる。

③治水対策が異なる

西蒲原や亀田郷は低地のため、近代になってポンプを使用する排水機場を造ることで、やっとな排水することができた。北蒲原は扇状地で高低差があることで掘割開削や川の瀬替によって排水が可能だった。

参加された皆様からは次のような嬉しいメールを頂きました。

・これまで理解していたように思っていたが、この研修で理解でき頭の中がすっきりした。
・下調べを丁寧に行っておられたので、現地で解説を聞く楽しさを味わった。



境川の締切について説明

断章―西安と函谷関に行く―

「みなとぴあ」と中国西安 博物院との友好一〇周年を記念する標記ツアーに、私も友好と記念企画展成功のミッションを担って加わり、十月二十八日午後二時、新潟空港を飛び立った。

ここで用向きはさておき、世界的な古代遺跡を見学した醍醐味の一部を記したい。

ツアーは第二日目、新幹線を利用し、西安から東に一時間余の三门峡市へ。そこは天下の險たる函谷関見学の出発地。駅頭には九州大学名誉教授の西谷正先生と親交もあるという現地ガイドの徐晟氏が洛陽から駆けつけてくれていた。

午後、東方勢力から西方の秦・前漢・唐の王都を守った函谷関の園地で自然地形や関跡、復元施設などをつぶさに見学。戦車の大部隊はここに突入できず、関の防衛によ

収蔵資料紹介

絵葉書「堀直寄寄進 金銅釣灯笼」

昭和九(一九三四)年から昭和二十年まで現在の新潟県政記念館に中野財団新潟郷土博物館があり、同館では県内の歴史地理を紹介するため、資料を借りたり、模型を作ったりして展示活動を行って

いました。展示資料については、同館が発行していた絵葉書でその一端を知ることが出来ます。

本資料は「第五輯」のうち一枚で、五泉市村松の正円寺が所蔵していた釣灯笼です。長岡・村上藩主として知られる堀直寄が元和三(一六一七)年に東照宮へ奉納したものと銘が

あります。この釣灯笼がいつ頃展示されていたのか不明です。戦後は正円寺に戻っていましたが、残念ながら昭和



堀直寄寄進 金銅釣灯笼

(田嶋 悠佑 学芸員)